ことばでさぐる日本の文化

語源の文化誌

杉本つとむ

創拓社

ことばでさぐる日本の文化

語源の文化誌

江苏工业学院图书馆
藏书章

杉本つとむ

創拓社

杉本つとむ　すぎもと・つとむ

一九二七年横浜生まれ。早稲田大学文学部卒業。現在、早稲田大学文学部教授。文学博士（東北大学）。

主な著書に、

『ことばの履歴書』（社会思想社）
『現代語語源小辞典』（開拓社）
『女のことば誌』（雄山閣）
『「宛字」の語源辞典』（日本実業出版社）
『東京語の歴史』（中公新書）
『江戸・東京語118話』（早稲田大学出版部）
『越谷吾山』（さきたま出版会）
『江戸の女ことば』（創拓社）
『西洋人の日本語発見』（創拓社）
ほか多数。

©Sugimoto Tutomu

語源の文化誌
一九九〇年四月一日　第一刷発行

著　者　杉本つとむ

発行者　井吹　晉

発行所　株式会社 創拓社
東京都千代田区神田神保町二―三八
稲岡九段ビル六階　〒一〇一
TEL＝〇三・二八八・七一〇〇
FAX＝〇三・二八八・七一六四
振　替＝東京七―五八五五〇

装　丁　勝井三雄

印刷製本　株式会社 加藤文明社印刷所
本文用紙　三菱製紙 株式会社

万一落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします。

ISBN4-87138-086-6 C0095

1990, printed in Japan

語源の文化誌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

第一章　ことばの生態学（エコロジー）――7
〈心中〉の生態と風土――9
〈いき・通〉と〈やぼ〉の美学――21
〈丹前〉と〈銭湯〉の庶民誌――30
〈あはれ〉と〈をかし〉の精神美――39
〈おいしい〉と〈おしゃもじ〉の知恵――49
〈老舗（しにせ）〉と〈暖簾（のれん）〉のこころ――66
〈好色〉と〈春色〉の人間界――74

第二章　ことばの社会学（ソシオロジー）――81
〈お開き〉と〈嫁が君〉の社会――83
〈隠語〉と〈センボウ〉の集団――95

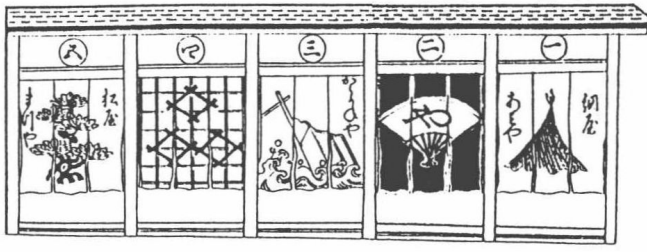
〈封切り〉と〈貸本屋〉文化——113
〈臭水〉と〈石油〉の効用——119
〈演説〉と〈経済〉の検証——124
〈江戸語—東京語〉の世界——135

第三章　ことばの語源学——153
〈鬼ごっこ〉と〈ぶらんこ〉の起源——155
〈牛馬の声・もののの音〉の世界——163
〈とちる〉は〈栃〉が源——169
〈愛〉と〈Love〉の真髄——180
〈語る〉と〈話〉の履歴——190
〈榊〉と〈躾〉の創作——199

第四章　ことば、置換と衝突——213
〈神経〉と〈膵臓〉の医事文化——215
〈舎密〉と〈化学〉の素姓——235

〈越歴（エレキ）〉と〈電気〉の実験——248
〈南蛮・紅毛語〉と外来文化——259
〈倶楽部〉と〈背広〉の国籍——270
〈八重洲口〉の因縁話——279
第五章　ことば、生理（フィジオロジー）と論理（ロジック）——289
〈名字（みょうじ）〉とネーミングの魔術——291
〈デアル体〉と長崎通詞——301
〈女と男〉——二つの国語——309
〈沈黙は金〉——ことばの美徳——316
〈女房に逃げられた〉の処置——325
〈句読点〉——日本語の生理と論理——331
あとがき——353
索引

一、ことばの生態学



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

〈心中〉の生態と風土

明治六年（一八七三）、日本にやってきたB・H・チャンブレンというイギリス人がいます。彼は後に東京大学の教師になりますが、日本語の学習から研究へとすすみ、その範囲はさらに日本文化やアイヌ研究・琉球研究にまでひろがっていきました。彼は十数か国語に通じ、なかでもフランス語・ドイツ語・日本語を自国語のように話したといいます。このチャンブレンが日本人の死にざまについて、興味あるエッセイをつづっているのです。一つは、〈数世紀にわたって日本人の好きな自殺手段であった――切腹（はらきり）Harakiri〉についてであり、もう一つは〈切腹よりももっと普通の型の自殺で、きわめてありふれたもの――心中（しんじゅう）〉についてです。〈切腹（せっぷく）〉は既に過去のものとなってしまいましたが、しかし〈心中〉は確かに数世紀にわたって日本人が選んだ死の処理法、生の終末をつげる方法です。チャンブレンはこういうのです。

心中（しんじゅう）、すなわち、愛のための自殺。自分の熱愛する人――たいていは、かよわい美

人だが――と結婚できないために、二人の身体をしっかり紐で結び、そして水の中に飛び込んだという話は数限りがない。しかし日本はこの点でも近代化した。今では紐や水の墓場ではなくて、クロロホルムを多量に飲んだり、近づく列車に飛び込んだりする。新聞を手にとれば、必ずこのような話に目がとまるのである。

〈心中〉が近代化したというのは、厳密にいえば、心中の方法が近代化したということでしょうが、現代はさらに近代化しました。クロロホルムに代って、自動車の排気ガスや電気（感電）、さらに内容の方も、熱愛する人との結婚などではなく、母子心中とか一家心中――と心中の生態もかわってきたといえます。

切腹も興味あるところですが、まずはこの〈心中〉をことばの点からほりさげて考えてみましょう。過去のできごとでなく、無用なことばの詮索ではなく、日本人や日本の文化にかかわる重い鍵をにぎることばの探索です。

チャンブレンのいうように、生命を奪う勇気――自分の生命でも、他人の生命でも――が、一般の尊敬のなかで、特に高い地位を占めているというのが、戦前の日本人の通念ではなかったかとわたしも思います。それは戦場で若者が華と散る＝散華にも象徴されるでしょう。もっとも、切腹にせよ心中にせよ、日本古来のものではありません。ことばとして、『源氏物語』など、古代語の世界にはみえないのです。今なお、日常的に――そう、

毎日の新聞をひらけば――、心中の二文字は生きて生活に根づいています。そこに生命を奪う勇気がはたらいているかどうかは問題ですが、絶望的困難から魂の救済を得ようとする時の、適切な処理法と考える日本人は、すくなくないのではないでしょうか。

〈心中〉ということばが、一世を風靡し、心中を流行させるまでになったという近松門左衛門の『曾根崎心中』（元禄十六年・一七〇三）は、〈心中〉を考えるうえで絶好のものかと思います。登場する二人の若い男女の心中行（道行と呼んだ）は、日本のシェイクスピアといわれる近松の筆で、つぎのように美しくつづられています。

この世のなごり夜もなごり死に行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ。あれかぞふれば暁の七つの時が六つなりて残る一つが今生の鐘のひゞきの聞きをさめ、寂滅為楽とひびくなり。鐘ばかりかは草も木も空もなごりと見あぐれば、くも心なき水の音、北斗はさえてかげうつる星の妹背の天の川……向ふの二階は何屋ともおぼつか情、最中にて、まだ寝ぬ火影声たかく、今年の心中よしあしの言の葉草やしげるらん

きわめてリズミカルな表現豊かな文章で、二十五歳の徳兵衛と十九歳のお初の心中を描いてあますところがありません。朝日にあたって霜がとけて消えてしまうように、二人の生命は一歩一歩と死に近づきつつあり、やがて心静かな永遠の楽土に魂の救済を得て、固

く〈妹背〉（夫婦）と結ばれるというのです。天にかかる天の河の牽牛（けんぎゅう）と織女（しょくじょ）の七夕のロマンを点綴（てんてつ）させて、生と死、この世とあの世のさかいをリアルに描いています。〈よしあしの言の葉草〉――心中のうわさが町の人びとの口の端にのぼるであろうと結びます。近松は当時、大坂でおこった実際の心中事件を題材にして、この脚本を書きあげたのですが、人形浄瑠璃という演劇のもつ美と民衆の共感は、歓喜の涙にむせんで、やがて〈心中〉ということばをはやらせ、美化し、一大ロマンの世界をつくりあげました。人はことばに酔い、ことばによって生活や行動も規定されます。この心中が法的に禁止されるようになるのも、ある意味では当然であったと思います。

さてしかし、〈心中〉が即、愛する二人の死を意味するというのは、ことばのうえでは問題です。文字どおりいけば、〈心の中〉の意にすぎないでしょう。辞書に、〈心中は心中死の略〉とあるゆえんです。およそ近松と同じころ、日本のバルザックとも称すべき小説界の鬼才、井原西鶴が、その多彩な才能にまかせて、やはり〈心中〉を描いています。近松は武士出身、しかし西鶴は町人出身で、同じ庶民の生活や風俗・心情を描いていても、視点は異なります。西鶴は劇作家ではありません。むしろ冷静な観察者――俳諧師として現実を写生する修業を四十年もつんだ――として、〈心中〉の過程を描き分析します。その著『好色一代男四』（天和二年・一六八二）につぎのような話がみえるのです。

（百姓らは世之介に）「月日をおくりかね、さま〴〵の心になつて今ここに美しき女の土葬を掘返し、黒髪爪をはなつ」といふ。「何のために」ときけば、「上方の傾城町へ毎年しのびて売りにまかる」と語りぬ。「求めてこれを何にする」ときけば、「女郎の心中に、髪を切り爪をはなち、先へやらせらるゝに、本のは手管の男に遣し、ほかの大臣（金持）へ、五人も七人も「貴様ゆへに切る」と文などに包こみて送れば、もとより人に隠す事なれば、守袋などニ入てふかく忝ながる事の笑しや、とかく、目の前にて切らし給へ」と申す。今までしらぬ事なり、さもあるべし……

特に注釈は必要なかろうと思います。死んだ女から切りとった髪や爪を、遊里で女郎に売って、生活費をかせぐ百姓たち。しかも、それを買った女郎はその他人の髪や爪を、〈女郎の心中〉として、遊びに来る遊客（男）に、〈あなたゆえにこれを切ってお送りします〉とまことしやかに送りとどける――わたしの愛の証をみてくださいというわけです。これをもらった男は、自分のお守袋に後生大事と入れて、〈ほれたあの女郎の髪だ!!〉とありがたがって、肌身離さぬというのです。しかしもとより、本物は手管の男、すなわち、ほんとうに情をかわす男にやるという、女郎の偽をすっぱぬいている場面です。〈心中〉のルーツはこの方がせまっているのです。西鶴の実体験によったか否かはともかく、主人公、世之介に託して、遊里の虚を読者に披露します。〈世界の偽かたまって美遊とな

れり〉という西鶴の哲学は、遊里という金と色とかけ引きの世界が、こうした〈心中〉のトリックを肯定しているというわけです。しかし、遊女にも真の愛を認めているのが西鶴です。〈死〉とはまったく関係なく、女郎の心の中の〈至誠〉を明示する重要な手段が、〈心中〉なのです。――わたしはあなた一人だけを愛しています、といつわらぬ愛を示すことを意味しているのです。だからこそ自分の肉体の一部である〈髪・爪〉を切りとって相手に与えるというのです。

ほかに〈指切り・血書〉などの方法もありました。〈心中立〉という言い方もしましたが、むしろその方が正式な言い方です。長唄にも、〈誰に見せうとて紅鉄漿つけうぞ、みんな主への心中立〉（京鹿子娘道成寺）というようにうたわれています。また〈それならば、おれに惚れたといふ心中を見しや。心得たと指を切らんといへば、扨は心中は知れた〉（『傾城仏の原二』元禄十二年・一六九九）という例もあって、ごく日常的に遊里では〈心中〉の語が用いられたのです。心の中の誠を示すということから、〈心中〉の熟語ができたのです。そしてさらにその誠意を示すための具体的な髪や爪を指すこともあったというわけです。さらに興味あるのは、〈心中箱〉のことです。これは、遊女からおくられた心中の証の髪や爪などを秘蔵しておく箱のことです。もとより本妻や他人にはかくすべきものですから、大切にしておかねばなりません。当時編集された『色道大鏡』（延宝五年・一六七七 序）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.